

第3章

「東北発・新型アグリツーリズム」への挑戦者Ⅱ

— くりはらツーリズムネットワークにおける取り組みの事例研究 —

安部 雅人

(公益財団法人東北活性化研究センター)

第1節 はじめに

日本では、戦後の社会経済の発展と共に、「都市」と「農村」の関係が大きく変化した。かつて「農村社会」に存在していた「農村資源」といわれたものには、「伝統的な建造物」等といった「有形」のものや、「文化」、「芸能」、「伝統産業」等といった「無形」のもの、そして、「農村社会」に調和した自然環境等が存在していた¹。以前の「農村社会」では、こうした「農村資源」を活用して素朴な形で生活が成り立っていたのである²。

しかしながら、その後の高度経済成長により、こうした「農村資源」は、近代的で利便性の高い工業製品にとって変わり急速に廃れたことで「農村社会」においても活力が低下し、過疎化や労働人口の流失等といった社会問題が全国的にみられるようになったのである³。

そして、今日の世界においては、経済のグローバル化による新たな経済戦略が目まぐるしく交差する中で急速な情報技術の発展も加わって人間の生活のリズムや仕事のリズムが加速化したことで、人々は、より高いストレスを感じる社会で暮らすようになったのである。

その結果、この高ストレス社会において、「農村社会」は、豊かな自然環境による癒しを提供する場所として、また、「伝統的な農村文化」、「農業」、「里山等における生物多様性を学習する場」として、さらに、「新鮮な食材を使った地元料理を味わう場」として再評価されるようになったのである⁴。

具体的には、「農村社会」の人々により行われる「アグリツーリズム」の諸活動が「農村資源」の保全と有効利用を図ることを可能とし、「農村社会」の地域活性化の方策としても有効であると認められるようになったのである⁵。

よって、今後も安定した日本の社会を築くためには、「都市」と「農村」が共に、豊かで安定した相互依存関係にあることが重要となる⁶。

※ 筆者の許可なしの対外言及・引用は、お控え願います。本稿の全文または一部を引用・転載・複製する際には、必ず出所元を明記願います。

- 1 (大江 2013) 参照。
- 2 (大江 2013) 参照。
- 3 (大江 2013) 参照。
- 4 (大江 2013) 参照。
- 5 (大江 2013) 参照。
- 6 (大江 2013) 参照。

他方、「東北発・新型アグリツーリズム」に必要な「人材育成」に求められているのは、「アグリツーリズム」に携わる「人材」における「経営者能力」の向上である。そのために必要な点としては、次のとおりである⁷。

- ① 「アグリツーリズム養成講座」の設置（全国的取り組み・地域内での取り組みとの相互補完）が必要となる点。
- ② 「アグリツーリズム養成講座」間のネットワーク化を計り、「情報」と「経験」のシェアを計り社会的学習の場を創出することが必要となる点。（※この場合、「アグリツーリズム養成講座」は、「アグリツーリズム起業塾」となっていることから、「アグリツーリズム」を志す人間が集うものと考えられる。）
- ③ 持続的で無理をせずに自然で温かい「おもてなし」をするための「いなかのホスピタリティ」の姿勢等が必要となる点。
- ④ 将来の「農業」を担う若年層を受講対象とした教育機関における「アグリツーリズム養成講座」の設置が必要となる点。（※この場合、将来、「就農」を志す若者を対象とした「アグリツーリズム教育」を実践する必要性があることから、「就農」を志して学んでいる「農業」を学ぶ高等学校や農林大学校等における教育カリキュラムとして、「アグリツーリズム教育」を導入することが必要であると考えられる。）
- ⑤ インバウンド対策として外国人対応のために必要となる点。

上記の必要な点に対応するためには、「農村社会」において「自立化した交流ビジネスの確立」を目指しながらも「農村」を安売りしたりせず、訪問者に対して過剰なサービスもしないことが重要であり、「農村社会」のオープンな地域のネットワークを活用して適度な距離感を保ちながら、温かみのある「農村」の「ホスピタリティ」を目指していくことが重要である⁸。そのため、「農村社会」では、「農村」のライフスタイルの良さを、どのようにして効果的に表現していくかが求められている⁹。

よって、本章では、互いの価値観や活動に共感しながら交流し、より良い関係を築くことを目的に地域資源を複合的に組み合わせた「アグリツーリズム」等を「くりはらツーリズム」として実践している一般社団法人 くりはらツーリズムネットワーク（以下、「くりはらツーリズムネットワーク」という。）の諸活動に着目し¹⁰、その特徴について分析し検証するものである。

7 （大江編 2017）参照。

8 （大江編 2017）参照。

9 （大江編 2017）参照。

10 2017年7月8日、くりはらツーリズムネットワークより聞き取り。くりはらツーリズムネットワークでは、「アグリツーリズム」による「体験プログラム」等による諸活動を中心に栗原市内外の人々に対して地域の価値を伝えようとしている。

第2節 くりはらツーリズムネットワークの団体紹介

(1) 活動状況

くりはらツーリズムネットワークは、「アグリツーリズム」や「エコツーリズム」、「体験」等を実践する栗原市民で構成する団体組織であり、「体験プログラム」を主体に、年間 150 回以上のイベントを実施している(写真 1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12 参照)¹¹。

写真1. (一社)くりはらツーリズムネットワーク事務所



(出所) 筆者撮影。

写真2. (一社)くりはらツーリズムネットワーク事務所



(出所) 筆者撮影。

写真3. (一社)くりはらツーリズムネットワーク講演風景



(出所) 筆者撮影。

写真4. くりはらファーマーズプロジェクト



(出所) (一社)くりはらツーリズムネットワークHP参照。

写真5. 体験プログラム(しめ飾りを作るワークショップ)



(出所) (一社)くりはらツーリズムネットワークHP参照。



(出所) (一社)くりはらツーリズムネットワークHP参照。

11 2017年7月8日、くりはらツーリズムネットワークより聞き取り。

「体験プログラム」の内容は、「農作業」、「調理実習」、「モノづくり」等多岐に渡り、地域資源を活用して会員それぞれが専門性を活かした内容としている¹²。

写真7. 体験プログラム(蓮根の収穫)



(出所) (一社) くりはらツーリズムネットワークHP参照。

写真8. 伊豆沼付近にある蓮根畑



(出所) 筆者撮影。

写真9. 体験プログラム(稲刈り)



(出所) (一社) くりはらツーリズムネットワークHP参照。

写真10. 体験プログラム(郷土料理の調理教室)



(出所) (一社) くりはらツーリズムネットワークHP参照。

写真11. 体験プログラム(栗駒山登山)



(出所) (一社) くりはらツーリズムネットワークHP参照。

写真12. 体験プログラム(渡り鳥観察会)



(出所) (一社) くりはらツーリズムネットワークHP参照。

また、「体験プログラム」を応用して「ツアープログラム」の企画運営や地域の手作り品を販売する事業等を実践している。

12 2017年7月8日、くりはらツーリズムネットワークより聞き取り。

くりはらツーリズムネットワーク会員種別・地区別一覧表をみると、会員数については、表1のとおり、個人・団体ともに一番多いのが一迫地区（団体18個所・個人6人）の計24会員であり、次いで、若柳地区（団体17個所・個人4人）の計21会員、築館地区（団体12個所・個人3人）の計15会員、栗駒地区（団体10個所・個人5人）の計15会員の順となる。それに対して高清水地区（団体1個所・個人0人）の計1会員と鶯沢地区（団体3個所・個人0人）の計3会員については、若干会員数が少ないようである。

表1 くりはらツーリズムネットワーク会員種別・地区別一覧表（会員数）

地区	個人(人数)	団体(個所)	計(会員数)
築館	12	3	15
若柳	17	4	21
栗駒	10	5	15
高清水	1	0	1
一迫	18	6	24
瀬峰	2	1	3
鶯沢	3	0	3
金成	4	2	6
志波姫	3	3	6
花山	9	3	12
合計	79	27	106



(注1) 2005年4月1日に栗原郡全10町村（築館町、若柳町、栗駒町、高清水町、一迫町、瀬峰町、鶯沢町、金成町、志波姫町、花山村）が合併した上で市制を施行し、栗原市が誕生している。2018年1月末現在で人口69,312人となっている。

(出所) 2017年7月8日、くりはらツーリズムネットワークからの聞き取りをもとに筆者作成。

くりはらツーリズムネットワークは、宮城県栗原市内の実践者が互いの価値観や活動に共感しながら交流し、より良い関係を築き、協働する「くりはらツーリズム」で地域の価値を普遍化し、市民が「文化的」・「精神的」・「経済的」に充足した暮らしを営むことに寄与することを目的としている¹³。そして、観光や「アグリツーリズム」等を通して地域の価値を高め、豊かな暮らしを実現したいと考えている¹⁴。具体的な、くりはらツーリズムネットワークの組織概要については、次のとおりである¹⁵。

【設立】 2010年3月21日

【法人成立日】 2016年4月1日

【会員数】 106会員（個人79、団体27）

「農家」、「農家民宿」、「農家レストラン」、「直売所」、「飲食店」、「宿泊施設」、「ガイド」、「畳店」、「陶芸家」、「能面師」、「大工」、「NPO」等

13 2017年7月8日、くりはらツーリズムネットワークより聞き取り。

14 2017年7月8日、くりはらツーリズムネットワークより聞き取り。

15 くりはらツーリズムネットワーク、<http://ktnpr.com/> (February 8, 2018) 参照。

【主な事業】

- ・交流事業…「体験プログラム」、「民泊」、「体験」、「教育旅行」等の受入、「旅行事業」の企画運営、「視察研修」の受入等
- ・販売事業…栗原手づくり市「十文字商店」
- ・調査研究事業…デザイン事業、研修事業、広報事業

【受賞歴】

- ・2015年度過疎地域自立活性化優良事例表彰 総務大臣賞（総務省）
- ・2015年度グッドデザイン賞 「体験プログラム」（公益財団法人日本デザイン振興会）
- ・第7回フード・アクション・ニッポン アワード 2015「食文化・普及啓発部門」 優秀賞（農林水産省）

【事務局】 常勤スタッフ4人（事務局長、研究員3人）

【役員】

- 代表理事／千葉 静子 ○業務執行理事／伊藤 廣司
- 理事／小野寺 敬、千田 浩平、千葉 優子、高橋 勇記、狩野 郁雄、高橋 幸代（コーディネーター兼務） ○監事／齋藤 政憲、阿部 功 ○顧問／黒澤 征男

【活動履歴】

2006年10月：「くりはら田園観光都市創造事業」の実施

- ・栗原市が「田園・自然・都市がもつ光を観せる産業」を創造するため取り組んだ事業故 麦屋弥生氏の指導を受け、地域資源の調査研究と多様な事業を実施。
- ・一次×二次×三次産業＝六次産業（観光）
- ・市民の「文化的充実」・「精神的充実」⇒住み続けたいと思う意欲の醸成

2008年6月14日：岩手・宮城内陸地震発生

2009年8月：みやぎグリーン・ツーリズムネットワーク栗原大会実行委員会を結成

2009年12月：みやぎグリーン・ツーリズムネットワーク栗原大会 開催

2010年1月：実行委員会を母体に「設立発起人の会」を発足（※合併前から取り組んでいる「グランドツアー」、「民泊」、「エコツーリズム」、「林間学校」等の活動を集約）

2010年3月21日：くりはらツーリズムネットワーク設立

2011年1月：事務局職員を雇用（※当初、事務局機能を行政（2部門）とNPO法人の3者で分担していた。）

2011年3月11日：東日本大震災発生

2012年10月1日：事務所を移転（民家を賃貸）（※市民活動支援センター貸事務室から移転）

2015年4月1日：事務所を移転（古民家を賃貸）

2016年4月1日：一般社団法人に法人化

【交流事業】

- 「体験プログラム」 ○くりはら博覧会「らいん」
- 栗原地元食大（※講師は栗原市民（会員）に限定、参加者は対象を限定していない。）
- 視察研修、民泊、ツアーの受入
- 「特別プロジェクト」（藍の手プロジェクト、長屋門で地域再生プロジェクト等）
- ツアーイベント等の企画運営 等
- くりはら観光塾（※栗原市からの受託事業：単年度契約）

【研修事業】

○先進地視察 ○講座 ○リスクマネジメント・応急手当 等 ○交流会

【広報事業】

○活動のPR（ウェブサイト、SNS、取材対応、講演事例紹介 等）

【販売事業】

○栗原手づくり市「十文字商店」

【調査研究事業】

○地域資源の調査研究

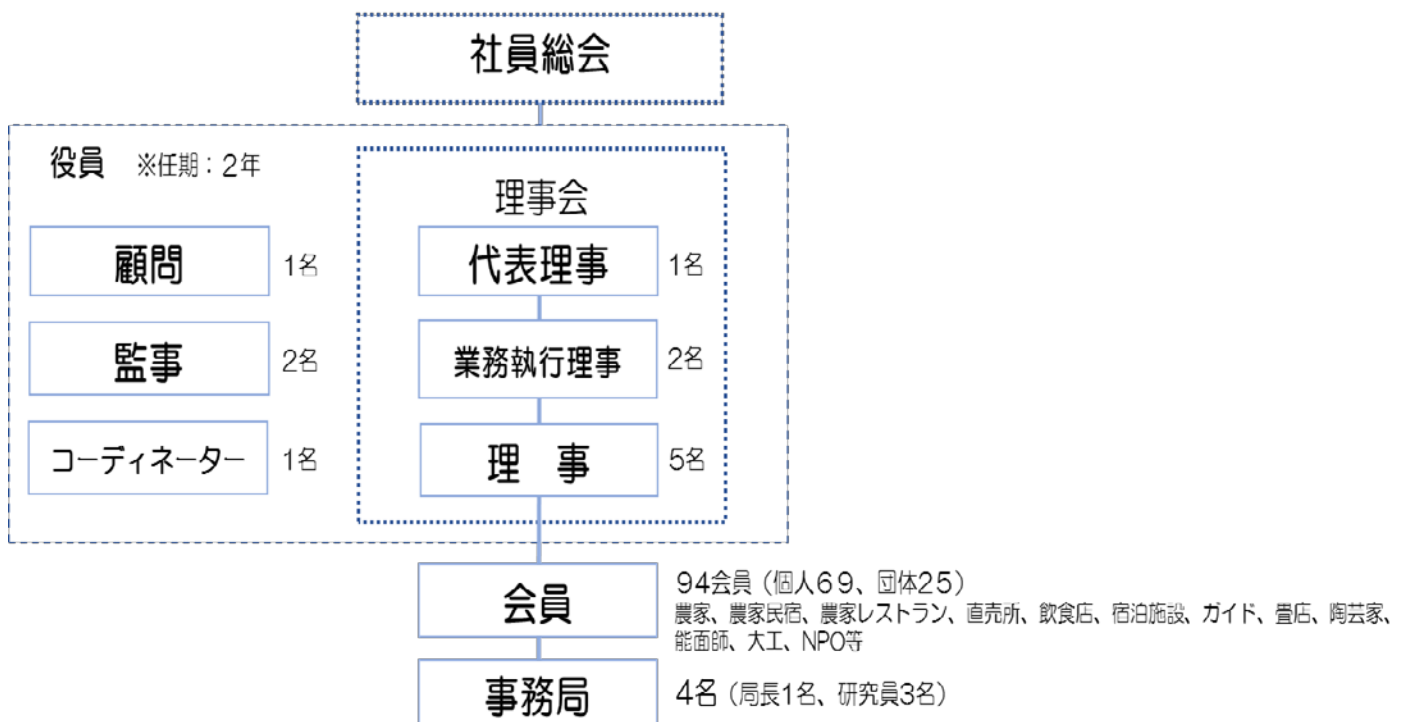
【デザイン事業】

○PR 媒体の作成請負（チラシ、リーフレット、Web、SNS 等）

【飲食・宿泊事業（将来の目標）】

また、くりはらツーリズムネットワークにおける組織構成については、図1のとおりとなっている。

図1 くりはらツーリズムネットワーク組織構成図



(出所) くりはらツーリズムネットワーク, <http://ktnpr.com/> (February 8, 2018) 参照。

第3節 くりはらツーリズムネットワークの「体験プログラム」

くりはらツーリズムネットワークでは、表2のとおり、会員（市民）が自らの趣味や特技、職業を生かした「体験」を活かすことを意識しながら、自分たち（家）のための技を外部（世間）に向けて提供することを意識している¹⁶。

表2 「体験プログラム」の活動状況

内 訳	参加者	事業数
1 体験プログラム等	2,064人	135回
（1）企画募集	1,227人	108回
①くりはら博覧会“らいん”2015秋	321人	33回
②栗原地元食大学2016年春学期	204人	18回
③藍の手プロジェクト	48人	5回
④ノルアル部	58人	6回
⑤伊豆沼・内沼エコツアー	88人	16回
⑥その他体験プログラム	508人	30回
（2）受入（体験・視察等）	837人	27回
2 販売（栗原手づくり市「十文字商店」）	1,960人	19回
合計	4,024人	154回

（出所） くりはらツーリズムネットワーク，<http://ktnpr.com/>（February 8, 2018）参照。

（1）「地元食」を活かした「体験プログラム」

宮城県栗原市は、伊達藩の穀倉地帯として稲作を中心とした「農業」を暮らしの中心に置いた暮らしを営んできた地域である。「農業」を真ん中にした暮らしであり、「まで」（※地元では「丁寧に行う」という意味）に手作りする「食文化」が脈々と生まれ、餅料理に代表される豊かな「食文化」が発展してきた¹⁷。

しかしながら、最近では、「大規模経営農家」が増えた中で、「兼業農家」が減少し、「大規模経営農家」と「サラリーマン家庭」の二極化が進んだことによる生活形態の都市化や東日本大震災後の福島第一原子力発電所事故による放射能汚染による影響等がみられるようになった。そのため、くりはらツーリズムネットワークでは、「食を手作りする「食文化」を「地元食」と位置付けながら¹⁸、地域の高齢者等を中心とした市民が「体験プログラム」等を通して「地元食」を伝える機会を創出したことにより、「地元食」から「地域の風土」や「歴史」、「産業」等を人々に伝えていきながら、賛同者を増やすことに成功した。そして、現在では、「地域の価値」をリデザインして醸成することを目的に活動している¹⁹。

16 くりはらツーリズムネットワーク，<http://ktnpr.com/>（February 8, 2018）参照。

17 2017年7月8日、くりはらツーリズムネットワークより聞き取り。

18 2017年7月8日、くりはらツーリズムネットワークより聞き取り。くりはらツーリズムネットワークでは、郷土料理は勿論のこと、今だからできる調理法も含めて「地元食」と呼んでいる。

19 2017年7月8日、くりはらツーリズムネットワークより聞き取り。

実際に、くりはらツーリズムネットワークでは、4月～12月の時期に「地元食」を活かした「体験教室」を「短時間・少人数・持ち帰り」を基本コンセプトにして実践している²⁰。

「短時間」であるのは、1回当たりの2時間～3時間にすることにより、普段の生活を忙しく過ごす人が参加しやすい環境を提供するためである²¹。

また、「少人数」であるのは、共同調理ではなく、参加者一人一人がなるべく調理の行程を一つ一つ学べるように、参加者が一人ずつ調理を実践するためである。そのため、少人数制の「体験プログラム」となっている²²。

さらに、「持ち帰り」であるのは、「体験プログラム」での「調理体験」を参加者だけの経験とするのではなく、自分が作った料理を持ち帰れるようにして家族や友人、同僚等に対して、こうした「体験」を自ら伝えられるようにするためである²³。

以上のようなコンセプトで実施することにより、くりはらツーリズムネットワークでは、参加者がより実践的に学ぶことで技術や知識の習得ができ、「体験」を他人と共有することにより参加者だけではない学びの広がりを実現しようとしている²⁴。そして、「地元食」の価値を丁寧に伝えることで草の根的ではあるが実践者を確実に増やし、さらに深い「体験」を通じて賛同者を増やそうとしている²⁵。

他方、くりはらツーリズムネットワークでは、各プログラムにおいて、各アクターをコラボレーションさせることで新たな価値を生み出している。

また、毎年秋には、一定期間内に、栗原市内の各地を会場にして、複数の「体験プログラム」を実施するイベントとして「くりはら博覧会“らいん”」を実施している。これは、会員が特技や職業を生かして、様々なプログラムをお客様に提供するものである。

さらに、くりはらツーリズムネットワークにおける「地元食」を巡るコンセプトについては、図2のとおりである。

図2 「地元食」を巡るコンセプト



(出所) くりはらツーリズムネットワーク, <http://ktnpr.com/> (February 8, 2018)参照。

20 2017年7月8日、くりはらツーリズムネットワークより聞き取り。

21 2017年7月8日、くりはらツーリズムネットワークより聞き取り。

22 2017年7月8日、くりはらツーリズムネットワークより聞き取り。

23 2017年7月8日、くりはらツーリズムネットワークより聞き取り。

24 2017年7月8日、くりはらツーリズムネットワークより聞き取り。

25 2017年7月8日、くりはらツーリズムネットワークより聞き取り。

なお、「地元食」を活かした「体験プログラム」や、その他の「体験プログラム」の各メニューとしては、次のとおりである²⁶。

①「がんづき」(がんづき × めかご)

がんづきは、地元栗原地域にて昔から「農作業」の休憩(小昼)で食べられてきた「地元食」である。自分で作る人が減ってきた「がんづき」を、作り手も利用する人も減ってきた「めかご」を使って作るプログラムである。

参加費: 2,000 円/人(※定員 12 人)(※実施時間:約 2 時間)

②「手づくり豆腐」(「農家」 × 「大工」)

大豆(ミヤギシロメ)を材料にした豆腐づくりを教わるプログラムである。「大工」が地元の材料で作った枠と「農家」が塗った布を使って作る。

参加費: 1,200 円/人(※定員 15 人)(※実施時間:約 3 時間)

③「洋菓子・パン作り」(洋菓子やパンも「地元食」)

地元の農産物を材料に使用して、洋菓子やパンを手作りするものである。地元産の材料を活用して手づくりすれば、洋菓子やパンも「地元食」となる。

参加費: 2,500 円～3,000 円/人(※定員 12 人)(※実施時間:約 2 時間～2.5 時間)

④「江戸料理で会席」(「農家」 × NPO、商工会等)

旧家の蔵に眠っていた 150 年前の古文書を解読して、レシピを復元する。復元した料理を食べるプログラムである。参加者から好評を得ている人気プログラムである。

参加費: 5,000 円/人(※定員 8 人)(※実施時間:約 2 時間)

⑤「和食のプロが料理」(「農家」 × 料理人)

和食の料理人が作った地産地消をテーマにした会席料理を食べ、「調理実習」で料理を学ぶプログラムである。

参加費: 2,000 円～2,500 円/人

⑥「れんこんくらぶ」(「収穫」だけではない「農作業体験」)

年間を通じて、れんこんを栽培するプログラムである。栗原市の伊豆沼周辺では湿地帯であることから、大小の沼地が点在し、蓮根栽培に適しており、高級食材として東京等で高い評価を得ている。しかしながら、その「収穫量」が少ないことから、宮城県内では、あまり流通していない幻の食材となっている。「種芋の植え付け」、「草取り」、「収穫」を「体験」し、オプションで地域の食や施設を見学している。

参加費: 8,000 円/人(全日程 6 回分)(※定員 10 人)(※実施時間:約 2.5 時間/1 回当たり)

⑦「ワラニオづくり」(消えゆく「ワザ」を伝える)

「有機農業」の田んぼで、ワラニオを作る「体験」である。

日常での必要性がなくなったワラニオだが²⁷、作るためには、藁を扱う「ワザ」がたくさん必要である。「ワザ」を伝える貴重な機会にしている。

参加費: 1,000 円/人(※定員 15 人)(※実施時間:約 5.5 時間)

26 くりはらツーリズムネットワーク, <http://ktnpr.com/> (February 8, 2018) 参照。各参加費については、開催時における金額である。

27 くりはらツーリズムネットワーク, <http://ktnpr.com/> (February 8, 2018) 参照。ワラニオは、脱穀後の藁を田んぼ等にて積み上げて保存する方法である。

⑧「しめ飾り・わら細工」（イエの教えをソトで）

10年以上、耕作されていなかった小さな田んぼを耕し、しめ縄用の田んぼを栽培し、育てた青い藁を使い、師走にしめ縄やしめ飾りを作る「体験」である。

参加費：2,000円～5,000円/人(※定員6人)(※実施時間：約2時間)

⑨「薪割り体験」（「農家」の手助け＝参加者の喜び）

鉞や斧での手作業と機械を使い、ひたすら薪を割るプログラムである。割った薪の半分は、参加者が持ち帰り、残りの半分は、薪の持ち主でプログラム提供者に置いていくものである。

参加費：2,000円/人(※定員10人)(※実施時間：約2時間)

⑩「マガン観察」（「観る」も大切な「体験」）

伊豆沼・内沼に飛来するマガンの早朝の飛び立ち、夕方のねぐら入りを観察するプログラムである。自然の圧倒的な光景から、自然と人の暮らしの関係を学ぶものである。

参加費：2,000円/人(※定員6人)(※実施時間：約2時間)

⑪「週末、親子で『農業体験ツアー』・『有機の田んぼで稲刈り』」

週末に親子で「農作業」を「体験」しながら、栗原市の見所を巡る「ツアープログラム」である。自然や地元の人とふれあいながら、「農業」を手作業で「体験」し、地方の暮らしを親子で体感し学ぶものである。

参加費：1,000円/人（3歳以下は無料。傷害保険料等を含む）(※定員40人)(※実施時間：約1日)(※栗原市外に居住の親子を対象としている。このプログラムは、栗原市の「農業体験事業」として、「送迎バス代」・「体験料」等の費用の一部を栗原市が負担している。)

⑫「田んぼから作るしめ飾りワークショップ」

田植えから稲を育てて刈り取り、刈り取った稲ワラで年末のしめ飾りを作るワークショップである。稲作の過程から生まれるワラは、様々な用途で使われてきた。特に年末に神棚や神社にかかげる「しめ縄」や玄関に飾る「しめ飾り」は、翌年も良い一年であることを願い年神様に来てもらうための暮らしの行事として、現代でも脈々と「文化」が受け継がれている。

ワークショップでは、ワラを材料にしめ飾りを作るのに加えて、一連の田んぼの作業を「体験」し、循環する昔ながらの暮らしの価値を再発見する。耕作する田んぼは、十数年の間、休耕田のままであったが、今回のワークショップを通じて、再び田んぼとして活用する。

参加費：8,000円/人（全日程・春夏秋冬の各時期計4回分）(※定員10人)(※実施時間：約2.5時間/1回当たり)

これらの「体験プログラム」は、図3のとおり、地域活性化を引き起こし、新しい形の「アグリツーリズム」としての価値を生み出すことで、地域のランドデザインとしての観光促進に大きく貢献している。

図3 「体験プログラム」によるシナジー効果

応用することで波及効果

普段の体験プログラムをアレンジして、大人数向けのイベントにも対応可能に。
 地域の特徴を紹介するのに体験プログラムは最適。



○旅行事業



- ・ツアーで体験プログラム提供
- ・ツアーの企画運営の受託

○定住移住



- ・PRのツアーで体験プログラム提供
- ・地域の特徴を紹介

○民泊



- ・都市圏の大学生の受入
- ・海外の子供の受入時に体験プログラム提供

○インバウンド



- ・外国人向けのツアーで体験プログラム提供

○ジオパーク



- ・ジオサイトを活用した体験プログラム提供
- ・ジオパークに関連する体験プログラムの啓出

○各種イベント



- ・地域を紹介するイベントで体験プログラム提供

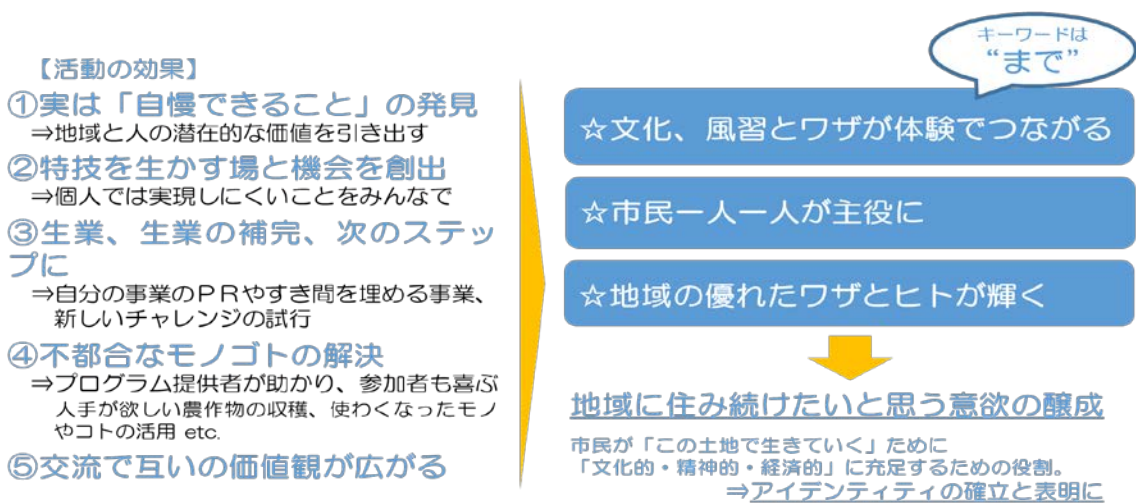
Oetc...

(出所) くりはらツーリズムネットワーク, <http://ktnpr.com/> (February 8, 2018) 参照。

また、普段の「体験プログラム」をアレンジして、大人数向けのイベントにも対応可能にした結果、地域の特徴を紹介するためには、最適の「体験プログラム」となっている。

くりはらツーリズムネットワークによる「体験プログラム」の活動の効果として、図4のとおり、地域にとって自分たちが自慢できることを発見し、互いに協力することで自分たちの特技をいかす場と機会を創出させ、生業の補完やステップアップ、不都合な物事の解決に繋げることができるようになることが期待できる。そして、他の地域の人々との交流人口の拡大を齎し、互いの価値観を広げていくものである。

図4 くりはらツーリズムネットワークによる活動効果



(出所) くりはらツーリズムネットワーク, <http://ktnpr.com/> (February 8, 2018) 参照。

その結果、「地域の文化」、「風習」、「ワザ」等を「体験プログラム」等によって繋げることで、市民を主役に押し上げ、「地域の優れたワザ」と「人」が輝けるようにしていくものである。

また、地域の人々が将来にわたって自分たちの地域に住み続けたいと思う意欲を醸成させることができる。

(2) 栗原地元食大学

2014年2月から始まった栗原地元食大学は、毎年、2月～3月の時期に「地元食」を通じて、「まで」に暮らしを営んでいく豊かさを地元の人が市内外の人々に伝え価値観を共有するイベントである²⁸。

くりはらツーリズムネットワークでは、「食は地域を知る一番の近道」と考えている。そのため、「食」を調べていくと、「地域の文化」、「風土」、「歴史」、「産業」等と人々の知恵と工夫といった「ワザ」の数々に繋がり、自分の住む地域を知ることによって、楽しみながら豊かに地元で暮らしていくことができるものと考えたのであった。その結果、2014年2月から、春先の時期(2月～3月)に限り、栗原地元食大学を開催することになったようである²⁹。

この場合、栗原地元食大学の校舎は、栗原市全部となっている。講師は、栗原市民(会員)を対象としているが、受講者は、対象を限定しておらず誰でも受講できる。

「地元食」の名人が講師となって、栗原市民を対象として「調理実習」や食べながら学べる「講座」を開催することで多様な内容で「地元食」を伝えようとしている。

その内容としては、手作りで蕎麦、饅頭、ハンバーガー用のパンズ等を作る「粉専科」、昔ながらの稲ワラを材料に釜台等を作る「道具専科」、手作り豆腐等を作る「豆専科」、花寿司等を作る「行事食専科」、地産地消の季節食を味わう「味わい専科」、家庭料理のレパートリーを増やすことが出来る「おかず専科」、米麴を用いて味噌や甘酒を作る「発酵専科」、地元産の材料を使ってお菓子を作る「おやつ専科」、地元の材料を使ってのチマキ等の保存食を作る「保存食専科」等がある³⁰。

(3) 「くりはら観光塾」

「くりはら観光塾」とは、多様な観光を学び、自分のやりたいことを一歩前進するための「講座」である³¹。多様な観光の知識や事例を学ぶために、様々な立場で観光に関わる実践者や専門家が講師を務めている³²。

28 2017年7月8日、くりはらツーリズムネットワークより聞き取り。

29 くりはらツーリズムネットワーク、<http://ktnpr.com/> (February 8, 2018)参照。

30 くりはらツーリズムネットワーク、<http://ktnpr.com/> (February 8, 2018)参照。

31 2017年7月8日、くりはらツーリズムネットワークより聞き取り。栗原市からの受託事業であり単年度契約である。くりはらツーリズムネットワークが主体的に関わっているわけではない。

32 くりはらツーリズムネットワーク、<http://ktnpr.com/> (February 8, 2018)参照。

観光の基本から優れた実践事例、インバウンドや DMO (Destination Management Organization : デスティネーション・マネジメント組織)等の業界の動向まで、座学と現地視察、ワークショップを通じて学ぶこととしており³³、多様な観光を学ぶことで、自分の活動をパワーアップできるようにしている。2017年度の「くりはら観光塾」の事例としては、次のとおりである³⁴。

(2017年度「くりはら観光塾」)

- ・ 期間：2017年7月～9月（全5回）
- ・ 定員：20人
- ・ 参加費：無料（一部、飲食代等の実費負担有り）
- ・ 対象：栗原市民または栗原市内に主たる事務所を置く団体、企業等に所属している人達。それ以外、聴講生として参加する場合、参加費1回あたり2,000円が必要とされている。

(4) 「特別プロジェクト」

以前、くりはらツーリズムネットワークが特定のテーマに取り組む「特別プロジェクト」があった。それは、大切にしたいけれど消えゆく「文化」、「風習」、「産業」に対してツーリズムがどのような力を発揮できるのかを探るためにチャレンジするプロジェクトであった³⁵。

これは、会員が社会的な課題と向き合って提案した企画について、くりはらツーリズムネットワークが主体的に取り組むことにしていたものである。具体的には、次のとおり、「藍の手プロジェクト」および「くりはら復古創新プロジェクト」等が挙げられる。

なお、「特別プロジェクト」については、これまでの「特別プロジェクト」が一定の活動成果をあげ、当初の目的としていた役割を終えたことから、現在、次回の「特別プロジェクト計画」に向けた充電期間として活動休止の状態にある。

a. 「藍の手プロジェクト」

「藍の手プロジェクト」とは、地域の「農家」の女性達が自給を目的に受け継がれてきた「正藍冷染」の「民の文化」を保存すると共に、その価値を学ぶためのプロジェクトである³⁶。

宮城県栗原市文字地区の千葉家に伝わる「正藍冷染」は、現存する日本最古の染色技法であり、藍を栽培し、自然発酵させて染色を行う草木染めの一種である。元々この染色技法は、中国から日本へ伝来し、平安時代には確立されたものとなって日本各地で盛んに行われていたものである。しかしながら、明治に入り、安価で容易に染められるインド藍や人造藍が日本に入ってきたことにより、「正藍冷染」は、一気に衰退の道を辿ることになる³⁷。

33 くりはらツーリズムネットワーク, <http://ktnpr.com/> (February 8, 2018)参照。

34 くりはらツーリズムネットワーク, <http://ktnpr.com/> (February 8, 2018)参照。

35 くりはらツーリズムネットワーク, <http://ktnpr.com/> (February 8, 2018)参照。

36 くりはらツーリズムネットワーク, <http://ktnpr.com/> (February 8, 2018)参照。2013年度より毎年実施していた。現在は、本プロジェクト活動の充電期間として活動休止の状態にある。

37 手とてとてー仙台・宮城のてしごとたち,

<http://tetotetote-sendai.jp/shoaihiyashizome/index.html> (February 14, 2018)参照。

それでも染色や織りの技術の進歩によって大量生産の衣類が出まわる中、東北地方6県および新潟県（以下、「東北圏」という。）等では、大正末期から昭和初期頃まではこの染色技法を使って自家で使う分の衣類等を染める家庭がいくつか残っていたのである³⁸。

現在広く行われている「藍染」では、藍瓶を加温して発酵の加減を調整しながら年中染めることができるものの、「正藍冷染」は、熱を加えることなく自然のままに発酵を促すため、染めのできる期間は初夏のごくわずかな時期に限られている³⁹。そこが「冷染」と呼ばれる由縁となっている⁴⁰。明治から大正期にかけては文字地区で「藍染」を行う家庭が20軒ほどあったといわれているが、戦後の時代には千葉家を残すのみとなった⁴¹。

その頃、白石和紙の再興に力を注ぎ、各地の手仕事を訪ね歩いていた「奥州白石郷土工芸研究所」の佐藤忠太郎（白石和紙拓本染めの創始者）が千葉家の「藍染」の実態を調査し報告を行った⁴²。その報告がきっかけとなり、藍を種から育て栽培、原料となる染で藍玉をつくり、機織りした麻布を染めるという一貫した作業を自家で行う技術が東京国立博物館染織室長であった山辺知行の目にとまり、脚光を浴びることになったのである⁴³。

実際、千葉家では、種から藍を育て、藍玉をつくり、藍だてをし、麻布を染める一貫作業を完全に保持している。特に藍だては、自然の温度で発酵させるのが特徴であり⁴⁴、1955年には、千葉あやの（故人）の代に「国の重要無形文化財」（人間国宝）の指定を受けている。

その後、娘の千葉よしの（故人）が技法を受け継ぎ、現在は嫁の千葉まつ江がこの貴重な技法を守り継いでいる⁴⁵。

他方、「藍の手プロジェクト」は、くりはらツーリズムネットワークと一般の方々により「藍の手プロジェクトチーム」を結成して進めてきた⁴⁶。そして、参加者は、貴重な「正藍冷染」を通して「正藍冷染」の作業工程の一部を「体験」しながら「藍染」と「地域の文化」を学び「正藍冷染」の作業の一助とすることで、貴重な「染色文化」の価値を共に学ぶことができたのである⁴⁷。

38 手とてとテ - 仙台・宮城のてしごとたち、
<http://tetotetote-sendai.jp/shoaihiyashizome/index.html> (February 14, 2018) 参照。

39 手とてとテ - 仙台・宮城のてしごとたち、
<http://tetotetote-sendai.jp/shoaihiyashizome/index.html> (February 14, 2018) 参照。

40 手とてとテ - 仙台・宮城のてしごとたち、
<http://tetotetote-sendai.jp/shoaihiyashizome/index.html> (February 14, 2018) 参照。

41 手とてとテ - 仙台・宮城のてしごとたち、
<http://tetotetote-sendai.jp/shoaihiyashizome/index.html> (February 14, 2018) 参照。

42 手とてとテ - 仙台・宮城のてしごとたち、
<http://tetotetote-sendai.jp/shoaihiyashizome/index.html> (February 14, 2018) 参照。

43 手とてとテ - 仙台・宮城のてしごとたち、
<http://tetotetote-sendai.jp/shoaihiyashizome/index.html> (February 14, 2018) 参照。

44 手とてとテ - 仙台・宮城のてしごとたち、
<http://tetotetote-sendai.jp/shoaihiyashizome/index.html> (February 14, 2018) 参照。

45 手とてとテ - 仙台・宮城のてしごとたち、
<http://tetotetote-sendai.jp/shoaihiyashizome/index.html> (February 14, 2018) 参照。千葉家の女性達が代々、農業を営みながら、その技を受け継いでいる。現在は、「宮城県重要無形文化財」に指定されている。

46 くりはらツーリズムネットワーク、<http://ktnpr.com/> (February 8, 2018) 参照。

47 くりはらツーリズムネットワーク、<http://ktnpr.com/> (February 8, 2018) 参照。

このように、「藍の手プロジェクト」は、「伝承者の千葉まつ江が奏でる『正藍冷染』のメロディーに心ある人たちの藍の手でリズム（作業）を刻み、新しい『正藍冷染』の楽曲（仕組み）を奏でる」といった取り組みである⁴⁸。

そして、「藍の手プロジェクト」は、参加者が「正藍冷染」の作業工程の一部を「体験」しながら、「藍染」と「地域の文化」や「歴史」を学び、「正藍冷染」の作業の一助とすることで、地域の「染色文化」の価値を共に学ぶことができる貴重なプログラムであったといえる。

※「藍の手プロジェクト」スケジュール例（※過去の事例）

- 6月下旬 ■事業説明、講話、見学 等
- 8月上旬 ■藍の刈取り、藍こぎ
- 8月下旬 ■藍畑の草取り
- 9月中旬 ■藍の2番刈、藍こぎ
- 10月上旬 ■藍のお花見会

b. 「くりはら復古創新プロジェクト」

杉皮剥ぎワークショップである「くりはら復古創新プロジェクト」については、震災等で破損した長屋門等をワークショップで修復しながら、昔ながらの「技」を学び合うプロジェクトであった⁴⁹。実施体制としては、くりはらツーリズムネットワークと一般の方で「くりはら復古創新プロジェクトチーム」を結成しプロジェクトを推進していったものである⁵⁰。

栗原市内では、相次ぐ大地震の被害等により地域固有の長屋門をはじめとした多くの建造物が損壊していたままとなっていた。

しかしながら、「農」に深く由来する建造物たちは、現代社会で役目を見出されず、修復されないまま崩れていた。また、建造物の損失は、長年培われてきた暮らしのなかの優れた「ワザ」の記憶をも同時に薄れさせてしまうことになる。そのため、「くりはら復古創新プロジェクト」では、建造物という「モノ」の修復を通じて、「モノ」にまつわる「ワザ」や「藍染」、風土といった「コト」の価値を再確認し、それを地域の「ヒト」が継承することで、足元の資源を大切にす暮らしを未来に繋いでいくための取り組みであった⁵¹。

実際には、20人程度の参加者を募集し、半年程の期間内に何回かに分けて長屋門の土台の修復や屋根の葺き替えに使用する杉皮剥ぎを行い、大和葺きという方法で屋根葺き、土壁塗り等のワークショップを行ったのである⁵²。

48 手とてとテ -仙台・宮城のてしごとたち、

<http://tetotetote-sendai.jp/shoaihiyashizome/index.html> (February 14, 2018)参照。活動する日は、天候や藍の苗の生育状況、作業状況によって決定していた。活動日の直前に日程が決まるが多かったようである。参加者の感想としては、「作業に加えて有識者から「正藍冷染」や「地域文化」を学ぶことができた点が非常に有意義であった」ともいわれている。

49 くりはらツーリズムネットワーク、<http://ktnpr.com/> (February 8, 2018)参照。現在は、活動休止中である。

50 くりはらツーリズムネットワーク、<http://ktnpr.com/> (February 8, 2018)参照。

51 くりはらツーリズムネットワーク、<http://ktnpr.com/> (February 8, 2018)参照。

52 くりはらツーリズムネットワーク、<http://ktnpr.com/> (February 8, 2018)参照。

ワークショップや教室等では、「体験」と「交流」のプログラムを活用し、専門家や有識者のアドバイスと地域の年配の職人の指導を受け、同じ志をもつ人々との協働で、建造物の修復に取り組むものであった⁵³。

また、「くりはら復古創新プロジェクト」では、古民家の再生にとどまることなく、その先の活用を所有者の意志と取り巻く人々との意識を合わせながら見出すことで地縁のコミュニティだけでは維持できなくなりつつある地域の「農の暮らし」を活用しながら守り伝える新しいコミュニティの仕組みを創造し未来に繋げていこうとしていたのである⁵⁴。

第4節 くりはらツーリズムネットワークによる諸活動の成果

「東北圏の農村文化資源」を踏まえた独自性の確立のためには、豊かで多様な「東北圏の自然」、「東北圏の伝統文化」、「東北圏の景観」、「東北圏の歴史」、「東北圏の温泉」、「東北圏の美食」等の活用を図り、地域固有性で「高品質」・「高単価」指向の「新型アグリツーリズム」を提供することが必要とされている。そうした中で、くりはらツーリズムネットワークの取り組みは、地域のランドデザインとしての観光促進と地域活性化について、次のとおり大きく貢献しているといえる。

- ① 実は「自慢できること」の発見：地元では、価値がないと思い込んでいたものを再認識し、地域と人の潜在的な価値を引き出すことに貢献している。
- ② 「特技を生かす場」と「その機会」を創出：個人では実現しにくいことについて地元住民や外部からの参加者の力を合わせて様々な機会を生み出している。
- ③ 生業、生業の補完、次へのステップ：自分の事業のPRやすき間を埋める事業、新しいチャレンジの試行を展開している。
- ④ 不都合なモノゴトの解決：プログラム提供者が助かり、参加者も喜ぶような両者にとって“Win Win”の関係を生み出している。人手が欲しい「農作物」の「収穫」、使わなくなった「モノ」や「コト」の活用等に応用できる。
- ⑤ 交流による互いの価値観の広がり：交流人口の拡大により、地元住民や外部からの参加者にとって互いの価値観が広がる。

第5節 くりはらツーリズムネットワークにおける中長期の見通し

くりはらツーリズムネットワークでは、2017年度から5年間を目処にした「中長期経営計画」を策定している⁵⁵。これは、これまで培った地域資源を活用した「体験プログラム」等の「知識」、「技術」、「人材」等を応用して、次の事業に取り組むことで「非営利活動」を可能にするための収益事業の確立を目指して取り組むものである。

また、くりはらツーリズムネットワークは、各種活動に必要な資金を安定的に確保するための仕組みを確立させる目的から、次のとおり大切な地域の価値の醸成を進めて次世代につなげたいとしている⁵⁶。

53 くりはらツーリズムネットワーク, <http://ktnpr.com/> (February 8, 2018) 参照。

54 くりはらツーリズムネットワーク, <http://ktnpr.com/> (February 8, 2018) 参照。

55 2017年7月8日、くりはらツーリズムネットワークより聞き取り。

56 2017年7月8日、くりはらツーリズムネットワークより聞き取り。

※くりはらツーリズムネットワークにて今後取り組む予定の各種事業

- 古民家等を活用した宿泊事業および飲食事業
- 商品開発により物販事業の拡充(工芸品・藁細工等)
- 「ツアープログラム」等の旅行関係事業の拡大(インバウンド・広域連携等)

第6節 むすび

このように、くりはらツーリズムネットワークによる取り組みとしては、「マス・マーケット」を対象としていない点、地域住民が主体となって生きた「農村ヘリテージ」の保有者となっている点、「文化」・「風習」・「ワザ」が「体験」でつながるようにしている点、地域住民一人一人が主役となって地域の優れた「ワザ」と「人」が輝き地域に住み続けたいと思う意欲の醸成を齎し出そうとしている点、地域住民がこの土地で生きていくために「文化的」・「精神的」・「経済的」に充足するための役割を果たすためのアイデンティティの確立に大きく貢献している点等が挙げられる。

当然ながら、これらの取り組みについては、「東北発・新型アグリツーリズム」への挑戦者として評価できるといえる。

参考文献

(日本語文献)

- 大江靖雄・A. Ciani、2005、「アグリツーリズム活動の多様化と資源利用の関連性ーイタリア・ウンブリア州を対象としてー」『農業経営研究』 第124号、124-127頁。
- 大江靖雄、2013、『グリーン・ツーリズムー都市と農村の新たな関係に向けてー』、千葉日報社、4-30頁。
- 大江靖雄編、2017、『都市農村交流の経済分析』、農林統計出版。21-138頁。
- 大江靖雄、2017、『農業と農村多角化の経済分析』、農林統計出版、103-204頁。

(外国語文献)

- Ohe, Y. 2011. "Evaluating the complementary relationship between local brand farm products and rural tourism: Evidence from Japan." *TourismManagement*.Vol.35. pp.278-283.
- Ohe, Y. 2014. "Characterizing rural tourism in Japan: Features and Challenges." in P. Diaz & M.F. Schmitz (eds.) *Cultural Tourism*. Southampton: WIT Press.pp.63-75.